

# 神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ

## －後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その9－

縄文時代研究プロジェクトチーム

### I. はじめに

縄文時代研究プロジェクトチームでは平成21年度より後期前葉期堀之内式土器文化期の様相についての研究を行っており、今年度で9年次目を迎える。初年度に以降の研究の基礎となる遺跡のデータベースを報告書を中心とした文献から作成し、それとともに、堀之内式土器文化期の研究略史の整理と主要遺跡地名表・参考文献リストの作成と提示を行った。それ以降、住居址検出遺跡を中心とした主要遺跡の集成、土器編年案構築に向けた一括出土事例や貝塚等の層位的出土事例の検討、堀之内1式土器、堀之内2式土器の編年案の作成、主要遺跡の分布図の作成を行い、そして平成26年度では検討した堀之内1式土器・2式土器の編年案にもとづいた住居址のデータシートと、編年案で得られた時期ごとの主要な住居址形態を抽出した集成図を作成するとともに、平成27年度では住居址のデータシートから各段階の住居址数から見た遺跡の分布状況、住居址の平面形態・張出部形態、平面規模、主柱穴配置・壁下構造・建替え、拡張、炉址、埋甕・その他付帯施設等の要素を抽出し検討を行い、堀之内式土器文化期の住居址の様相を明らかにした。平成28年度は出土遺跡の資料の増加を見て報告書を基本とした資料の補遺に努めたが、今年度は平成26年度、27年度の住居址研究を受けて、堀之内式土器文化期の文化的様相をさらに明らかにするために住居址以外の遺構の様相について扱うこととした。対象とした遺構は、墓坑・埋葬人骨、配石遺構、竪穴状遺構、掘立柱建物跡、土器集中、屋外埋設土器、貝塚・住居内貝層、焼土址・灰址・炭化物集中、集石、その他の土坑、木道、帶状粘土列、水場遺構であるが、貯蔵穴については次年度以降に掲載することとする。

住居址以外の遺構を整理するため、まず遺構種別ごとに分類し、データベースとなる法量などを記載した属性表を作成した。今回の各遺構についての論述はそのデータベースに基づいている。

各遺構のうち、墓と配石遺構や、墓と貯蔵穴、その他の土坑などについては区分が不明瞭である場合が多くあったため、各遺構の論述担当で適宜区分基準の調整を行ったが、基本的には報告書に記載された遺構の評価に準拠しており、名称も報告書に従っている。

また、今回扱った遺構は、平成21年度に収集した報告書を基本とした基礎的な遺跡のデータベースと平成25年度と28年度に追加した遺跡のみから抽出している。しかし、近年継続中の第二東名高速道路建設等に伴う広域、大規模な発掘調査によって伊勢原、秦野地域において縄文時代では特に縄文後期前葉から中葉にかけての集落址等が顕著に確認され膨大な資料の増加をみており、遺跡見学会や遺跡調査研究発表会等によって世間にも知られるところとなっている。仮にこれらの資料を加えた場合は前年度以前も含めて内容が変化するほどの影響があるものと考えられるが、今回は報告書に刊行された資料のみを扱うこととし、これらについては触れないことをお断りさせていただきたい。

(粕谷)

## II. 住居址以外の遺構

### 1. 墓坑・埋葬人骨（第1・2図）

ここでは、堀之内式期の墓について分析する。対象としたのは、17遺跡436基の墓坑および埋葬人骨である。なお、墓としての判断基準は、人骨の有無、副葬品の有無、墓群の形成（平面形態・断面形態の類似性）等が挙げられるが、原則として報告書の記述に拠った。分析対象とした属性は、墓の種別、立地（集落内における位置）、平面形態、帰属時期、副葬品、地域性である。なお、貯蔵穴等の転用墓については、報告書に記述がない限りは除外している。また、報告書において堀之内式～加曽利B式期とされている伊勢原市下北原遺跡の第1配石墓群・第2配石墓群については、墓群全体に対する上部配石と個別墓としての配石墓・土坑墓の同時性について議論があるため、今回は分析対象から外している。特に石棺状をなす配石墓については、加曽利B式期以降に多い墓制であることも踏まえ、個別墓と上部配石の関係性および時期的な問題については、ここでは保留しておきたい。

まず墓の種別であるが、土坑墓428基、配石土坑墓（上部配石を伴う土坑墓）5基、埋葬人骨1体、土器棺墓1基となり、圧倒的に土坑墓が多い。なお、ここでいう埋葬人骨とは、貝塚等における墓坑を伴わない埋葬人骨のことであり、人骨が検出されていても、墓坑が見つかっているものについては土坑墓・土器棺墓としてカウントしている。

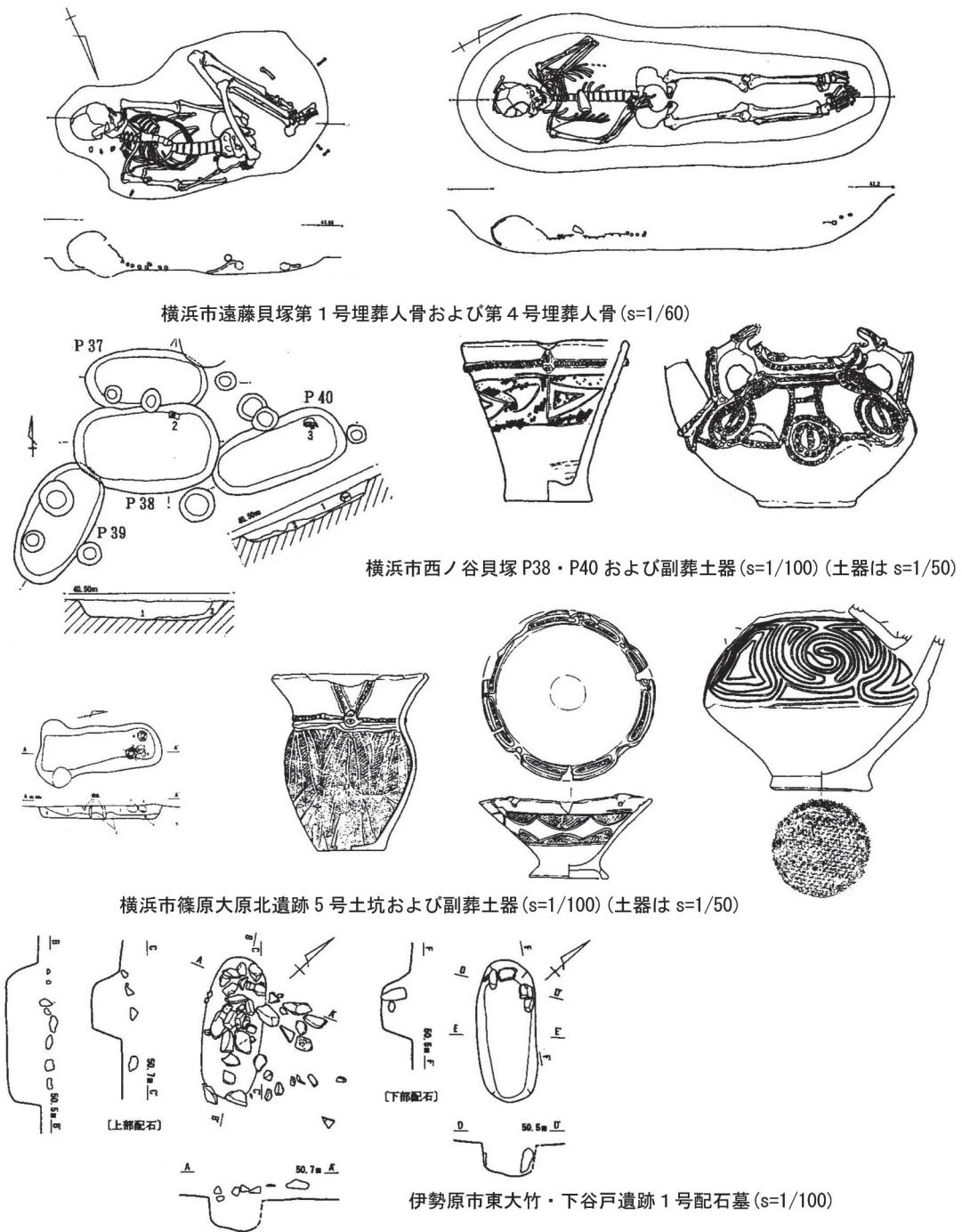
立地については、基本的に集落内に墓域を形成し、同時期の墓坑が集中する墓群をなす場合が多いようである。集落内における位置が分かる事例はそれほど多くはないが、居住域から僅かに離れた空白域に配される傾向にある。また、確定的なことは言えないが、堀之内式期の墓群は、続く加曽利B式期の墓群に比べると切り合い関係、密集の度合いが弱いように感じるのだが、どうであろうか。

墓坑の平面形態については、最も数の多い土坑墓について見てみると、隅丸長方形（隅円長方形）299基、楕円形67基、長楕円形19基、長方形11基、不整長方形10基、不整楕円形10基、隅丸方形5基、不整長楕円形3基、円形2基、不整形1基、不整隅丸長方形1基、不整方形1基となり、長方形基調と楕円形基調に大きく分かれている。数の上からは隅丸長方形が多いのだが、次に述べる墓坑の帰属時期・副葬品の問題とも絡むので、堀之内式期の土坑墓は隅丸長方形が一般的であると概には言えない。

墓坑の帰属時期は分からぬことが多いが、副葬品がある場合のみ明確に比定されうる。ただし、副葬品の有無は時期的な偏在の問題もあり、堀之内式期の副葬土器は概して少ない。例えば、横浜市三の丸遺跡の事例では、後期土坑墓群241基（加曽利B式期が多いとされる）のうち副葬品が検出されたのは31基（13%）であり、そのうち堀之内式期に属するものは僅か2基（1%）であった。今回対象とした墓坑についても、帰属時期を特定できたのは、副葬品がある事例（堀之内1式期8基・堀之内2式期12基・後期前葉2基）および特定時期の単純集落の墓群のみであり、時期別に集計すれば、堀之内1式期27基、堀之内2式期23基、後期前葉130基、後期前半140基、後期前葉～中葉110基、堀之内1式～加曽利B1式期4基、堀之内2式～加曽利B1式期1基となり、時期を特定できない場合が多い。これらの中には、加曽利B式期の墓坑も数多く含まれていることが想定されるのであり、前述した隅丸長方形の平面形態についても、加曽利B式期に一般的な形態として知られている。堀之内1式の土坑墓27基のうち、平面形態は隅丸長方形12基、楕円形基調14基となり、数量的には拮抗している。対して堀之内2式期の土坑墓22基では、隅丸長方形18基、楕円形4基となり、隅丸長方形が主体となっている。

地域性は言うまでもなく多摩川・鶴見川水系363基が圧倒している。これは横浜市内の調査事例が多いこ

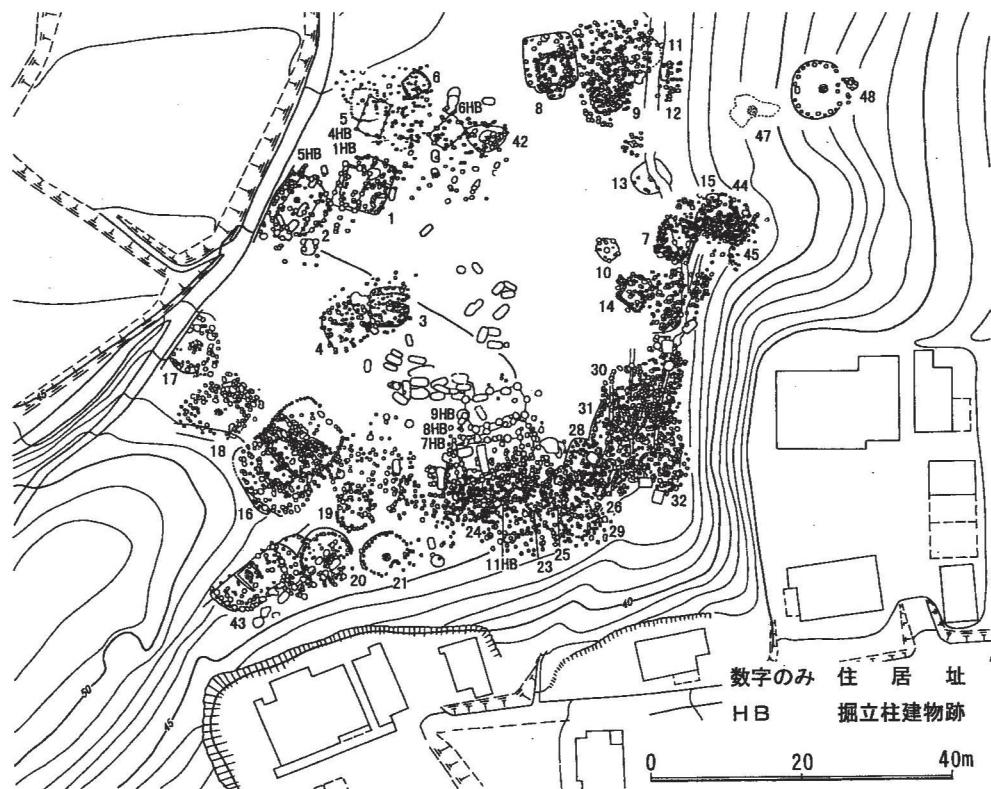
とに起因しており、調査されている集落遺跡の数量がそのまま墓坑の数量に反映されていると理解することができるだろう。なお、数は少ないが、配石土坑墓5基はすべて相模川水系以西に分布しており、墓坑数量で卓越している横浜市内では1基も発見されていない。いずれにしても、今回の分析では、神奈川県内における堀之内式期の墓坑は土坑墓が主体であり、集落内に墓域を形成すること、平面形態は隅丸長方形・橢円形が多いこと、副葬品は少ないと、多摩川・鶴見川水系に多く分布することが確認された。  
(野坂)



第1図 堀之内式期の墓坑（1）



(1) 横浜市華蔵台遺跡における墓坑時期別分布図 (S=1/100)



(2) 横浜市華蔵台遺跡における遺構配置図 (S=1/100)

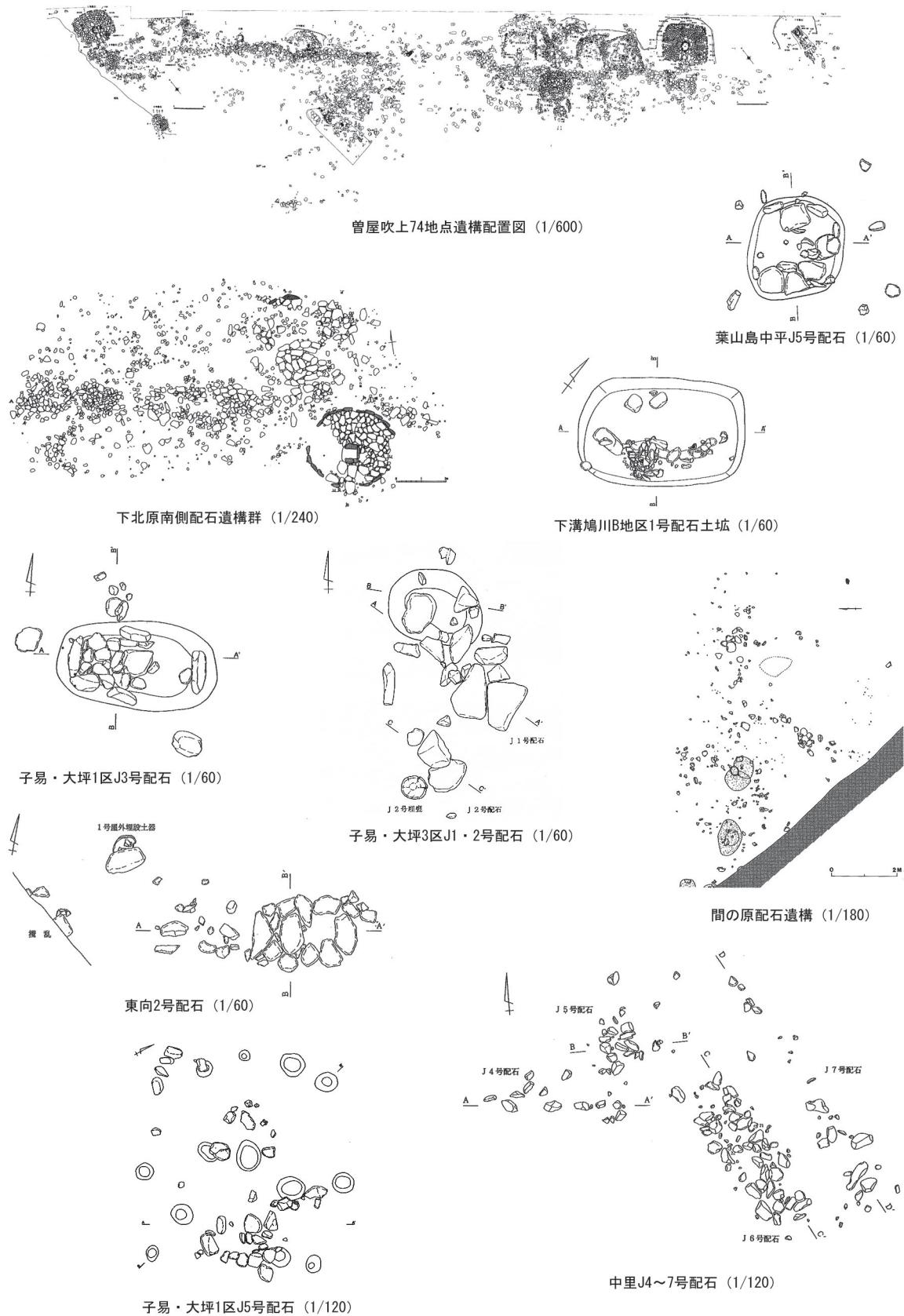
第2図 堀之内式期の墓坑 (2)

## 2. 配石遺構（第3図）

ここでは、報告書で「配石」と記載された遺構を対象としているが、報告書にて墓とされる配石や墓上の配石は墓坑としてあつかうため除外する。対象となる遺跡数は22遺跡、配石遺構もしくは配石群の数は、報告書による記載をもとに79基を数える。これらの配石遺構を便宜的に付随もしくは関連する遺構で分類すると、①住居に隣接するもの、②下部土坑を伴うもの、③その他の遺構（焼土址や埋甕、ピット、炭化物等）を伴うもの、④遺構を伴わず単独のもの、に分けることができる。また、配石遺構にはさまざまな形状のものがあるが、ここでは、平面的広がりを重視して列状、環状、塊状、散在に分けて記載した。

住居跡に隣接する配石遺構には列状（帯状）をなすものが多い。相模原市緑区はじめ沢下遺跡では、後期前葉に帰属するI区列状配石が確認されている。この列状配石は、15mほどの列状に配されたJ1号～10号配石（J8号配石のみ土坑を伴わない）およびJ1号、J2号列状配石からなる。この北側の斜面上に3棟の住居（J1号、J2号、J8号敷石住居址）があり、列石はそれらの前面に展開する。愛甲郡清川村馬場（No.6）遺跡では、10m×4mの範囲に弧状をなすJ1号配石が、北端に土坑状の掘り込みを伴って確認されている。出土遺物から堀之内2式期とされるが、J4号住居跡（加曾利B1式期）の張出基部に連なる位置にあり、加曾利B1式期に下る可能性もある。同遺跡J2号配石とされるものも、9m×5mの範囲に弧状に礫を配するもので、J1号、J2号掘立柱建物跡にまたがり、隣接地にJ4号、J5号焼土址がある。堀之内1式期と思われる下北原系土器が出土している。一方、伊勢原市下北原遺跡南側配石群（堀之内1式期）は、同時期の第21号、第22号敷石住居址に隣接して発見され、第22号住居跡の張出基部付近から西に展開する。南側配石群は環状もしくは塊状をなす4つのユニットから構成され、全体として等高線に沿うよう幅2.3mほど、長さ10.8mほどの列状を呈する。また同遺跡では、堀之内1式期の所産とされる北側配石遺構B群がある。北側配石遺構は、第3号環礫方形配石遺構とそれを取り囲む配石群からなるA群と方形にめぐる配石群のB群から構成される。B群は10m四方ほどの帯状に礫を配するもので、一部に石棒や磨石、石皿を配し、下部遺構をもたない。本遺構は、2号、3号環礫方形配石（いずれも加曾利B1式期）にはさまれた位置にある。くわえて同遺跡には、北側配石遺構から12mほど西の位置に該期の環状組石遺構もある。環状組石遺構は長径9.5m、短径6.5mの範囲に川原石を環状にめぐらせるもので、東側と北側、南側の一部に立石を伴うものの、下部遺構の検出はない。同様に住居に隣接する配石で該期に帰属する可能性があるものとして、秦野市曾屋吹上遺跡（1974年度調査）がある。等高線に沿って堀之内2式期～加曾利B1式期の住居が並び、それらを覆いながら横に連結する列石が構築される。報告で各遺構の時期について言及はないものの、5号敷石住居址炉体土器が堀之内2式で、1号、6号敷石住居址から出土した土器の多くが堀之内2式で、状況からみて最も新しい10号敷石住居が加曾利B1式と想定される。列状配石は、最終段階で構築された可能性もあるが、住居に伴うもしくは住居に後続するものがあるとすれば、堀之内2式期に列石の構築が開始されたと考えることも可能である。

つぎに、下部土坑を伴うものとして、横浜市緑区住撰遺跡配石遺構SH001、保土ヶ谷区帷子峰遺跡1号、2号配石土壙、相模原市緑区葉山島中平遺跡J5号配石、同青根馬渡No.2遺跡J1号配石、南区下溝鳩川遺跡B地区1号、2号配石土壙、伊勢原市子易・大坪遺跡1区J3号、J4号配石、3区J1号、J3号～7号配石、秦野市中里遺跡J8号～10号配石、寺山金目原遺跡9904地点配石群がある。このうち土坑が長径1.5～2.0mの長方形もしくは橢円形をなすものとして、青根馬渡No.2遺跡J1号配石、下溝鳩川遺跡B地区1号配石土壙、小易・大坪遺跡1区J3号配石、同3区J5号配石、中里遺跡J8号、J10号配石、寺山金目



第3図 配石遺構

原遺跡9904地点配石群があり、墓坑に伴う配石遺構の可能性もある。これら以外は1mほどもしくはそれ未満の土坑を伴い用途は不明である。

その他の焼土址や埋設土器、ピット、炭化物等を伴うものを一括する。焼土址を伴うものとして、横浜市青葉区稻ヶ原遺跡A地点において環状に礫を配するB-1号配石遺構が、座間市間の原遺跡では、2単位のまとまりを含む散在する配石遺構と3カ所の焼土が検出されている。太岳院遺跡93-4地点では3、4カ所の塊状のまとまりをもつJ1号、J2号配石があり、同一確認面で焼土が発見されている。埋設土器を伴うものとして、中井町東向遺跡では、一部環状に配された塊状の2号配石に隣接して上部に礫をもつ埋設土器（1号屋外埋設土器）が発見された。同様に埋設土器に隣接するものとして子易・大坪遺跡3区J2号配石があり、土器集中を取り囲む配石として大磯小学校遺跡A4～5区配石遺構がある。ピットを伴うものとして相模原市寸嵐二号遺跡2号配石、伊勢原市子易・大坪遺跡1区J5号配石があり、炭化物や獸骨（シカ）に隣接する配石として大磯小学校遺跡A14～15区配石がある。また、寺山金目原遺跡9904地点配石群の下部では、土坑のほかに、焼土址や埋設土器、多数のピットが検出された。

遺構を伴わず単独で構築されるものとして、横浜市都筑区華藏台南遺跡では、堀之内1式土器を出土し比較的細かな礫からなる1号散石（散在）が確認された。相模原市南区新戸遺跡では、堀之内式土器を出土したJ-52号配石（塊状）、相模原市緑区葉山島中平遺跡にてJ1号～4号、J6号～8号配石（塊状もしくは散在）、相模原市南区下溝鳩川遺跡C地区で1号配石（散在）、伊勢原市池端・坂戸遺跡にてJ1号配石（塊状）、下北原遺跡IIではJ1号配石（環状）、子易・大坪遺跡1区にてJ1号配石（環状）やJ2号配石（散在）、同遺跡3区J2号配石（列状）があり、東大竹・下谷戸（八幡台）遺跡では1号配石（塊状、堀之内式期）がある。秦野市曾屋吹上遺跡にて1～4区からなる集礫（環状、塊状、散在）があり、太岳院遺跡92-2地点ではJ1号配石（塊状）、同遺跡92-5地点でJ1号～5号配石（環状もしくは塊状）、中里遺跡で一部に堀之内2式土器を伴うJ1号～7号配石がある。中里遺跡J3号配石には近接した位置にJ1号埋設土器があり、一方、同遺跡J1号、J6号配石は長軸2m×1mほどの長方形に礫を配していることから墓坑であった可能性がある。

(阿部)

- 石井 寛 1994 「縄文後期集落の構成に関する一試論—関東地方西部域を中心に—」『縄文時代』第5号、pp. 77-110  
 石坂 茂 2002 「縄文時代中期末葉の環状集落の崩壊と環状列石の出現—各時期における拠点的集落形成を視点とした地域の分析—」『研究紀要』第20号、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、pp. 71-102  
 石坂 茂 2004 「関東・中部地方の環状列石—中期から後期への変容と地域的様相を探る—」『研究紀要』第22号、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、pp. 51-94  
 石坂 茂 2017 「「核家屋」集落の構造—群馬県横壁中村遺跡を中心とした分析—」『縄文時代』第28号、pp. 1-26  
 松田光太郎 2007 「南関東地方の諸遺跡」『季刊考古学 日本のストーンサークル』第101号、pp. 60-64  
 山本暉久 1991 「環状集落と墓域」『古代探叢Ⅲ』早稲田大学出版部、pp. 137-178  
 山本暉久 2002 『敷石住居址の研究』六一書房

### 3. 壓穴状遺構

堀之内式土器文化期に属すると思われる堅穴状遺構と呼称される遺構の検出例は井ノ口平治山遺跡の第1号堅穴状遺構の1例のみである。この遺構は調査区外に延びているため正確な規模は不明だが、現存長で13.86m×8.64mの規模で不整形を呈する。縄文時代中期から堀之内式までの時期の土器が出土しており、土器に完成品がないことから廃棄場としての機能が考えられ、不整形を呈するのも何度も作り替えが行われたためではないかと報告されている。

(粕谷)

#### 4. 掘立柱建物跡（第4図）

縄文時代後期の堀之内式期の掘立柱建物跡を調査報告書から6遺跡40例を抽出した。その内容は、横浜市所在の原出口遺跡4例、華蔵台南遺跡3例、川和向原遺跡9例、川崎市所在の井田中原遺跡4例、綾瀬市所在の上土棚南遺跡17例、伊勢原市所在の東大竹・下谷戸（八幡平）遺跡3例となっている。

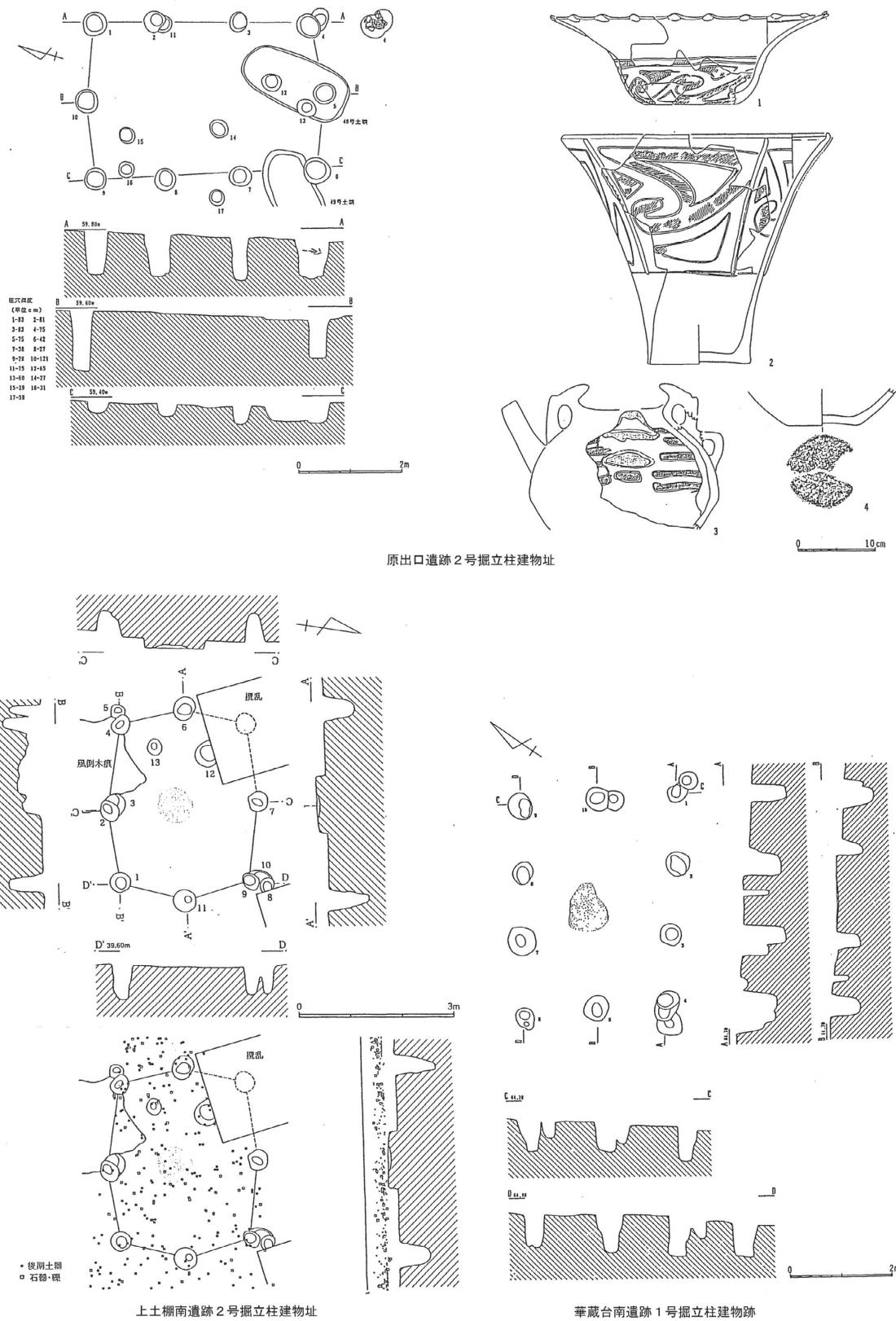
これらの遺構の分類にあたっては、掘立柱の列から大きく2種に分類することができる。A類は、柱穴が2列に一周するもので、1辺につき2本から4本があり、その中間にあたる主軸線上に棟持ち柱の位置を推定する2本の柱があり、それを含めると6本から10本の柱穴列となるものである。B類（群）は、A類の柱穴列の中央や副軸線上に1本から3本ほどの柱穴列を伴うものである。抽出した堀之内期の柱穴列は、A類に属するものがほとんどで、棟持ち柱の位置を想定する2本の柱穴が主軸線上にあり、僅かに外に「く」の字状に出るタイプが多い傾向を得ることができ、いわゆる「亀甲形」を呈するものである。なお、縄文時代中期に多く見られた、柱穴が一辺3本から4本で長方形に一巡、あるいは2重に巡るものはほとんど見られなくなるようである。

そして、柱穴列を構成するピット群の中、あるいは周辺から出土する土器を基準に時期区分すると、堀之内期の掘立柱建物跡を2時期に分類することができる。1期にあたるのが横浜市の川和向原遺跡の1・19号掘立柱建物址、綾瀬市の上土棚南遺跡の1号掘立柱建物址などがあげられる。2期では横浜市原出口遺跡1・2・3号掘立柱建物址、横浜市川和向原遺跡5・7・8・10・11号掘立柱建物址、華蔵台遺跡2号掘立柱建物跡、綾瀬市の上土棚南遺跡8号掘立柱建物址があげられる。なお、遺構の性格上、遺構に伴う遺物を限定することが難しく堀之内1式から2式期、あるいは、堀之内2式から加曾利B式期という報告になってしまふものも少なからず存在してしまうようである。

次に、事例として図示した3例について規模等を見ていきたい。柱穴列のあり方は1辺に3～4本×2列に棟持ち柱2本が付随するものが多く、定型化されるように見えている。各遺構の規模は、次のとおりである。先ず、原出口遺跡2号掘立柱建物址は妻側3本、桁（平）側4本の柱穴から構成され、梁行3.0m×桁行4.6mを測る。この遺構に伴う遺物は、南東隅に配置された柱穴4より出土しており、口径36cmほどに復元され胴部に渦巻文を横位に連続させる浅鉢形土器、口径35cmの深鉢形土器などである。いずれも、堀之内2式期の位置づけられるものである。上土棚南遺跡2号掘立柱建物址は妻側3本、桁側3本の柱穴から構成され、梁行2.92m×桁行3.05m、棟持ち柱間3.66mを測る。また、桁行の中央部が膨らむように張り出し、柱穴間の中央部に炉跡（焼土）を配するものである。出土遺物は小片ながら堀之内式期の所産と報告されている。華蔵台南遺跡1号掘立柱建物跡は妻側3本、桁側4本の柱穴から構成され、梁行4.60m×桁行3.40m、棟持ち柱間は張り出さない形態のものである。また、遺構の中央部に炉跡（焼土）を配するものである。遺構の時期は、炉址の検出状況のあり方から『縄文中期に検出されている「長方形大形住居跡」のそれに共通する』としながらも、同遺跡内の土坑との切り合い関係から堀之内式期の範疇と報告されている。

また、この掘立柱建物跡に付隨する遺構として取り上げられているのは、上土棚南遺跡6・7・8号掘立柱建物址の柱穴列の中の焼土跡で、検出された柱穴列の上屋構造と床面の位置を想像させるものである。床面や柱の位置を基準とした建物の構造、さらには建物の利用機能が推定されるが、竪穴住居跡とは相違する施設として共同作業の場や、祭祀や葬送、倉庫など多くの遺構の場合、建物の認定という観点では、柱穴が重なっていることもあり、柱の位置など発掘調査現地での判定が重要となってくるものと思われる。（小島）

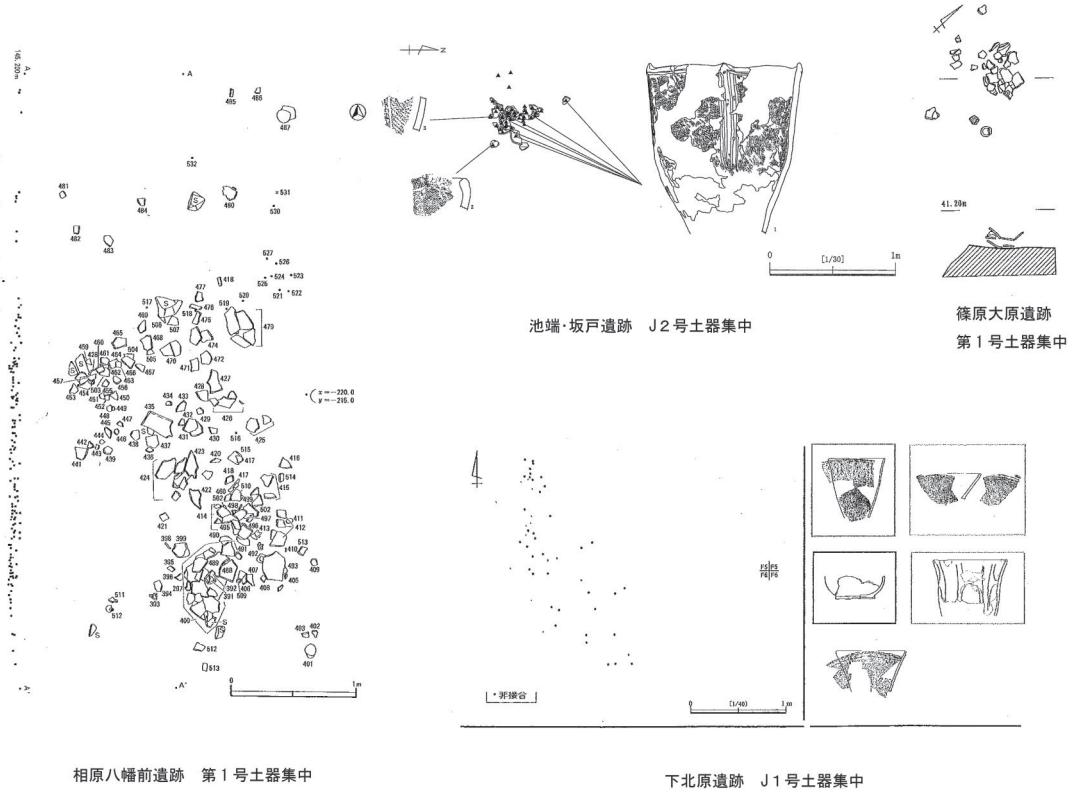
神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ

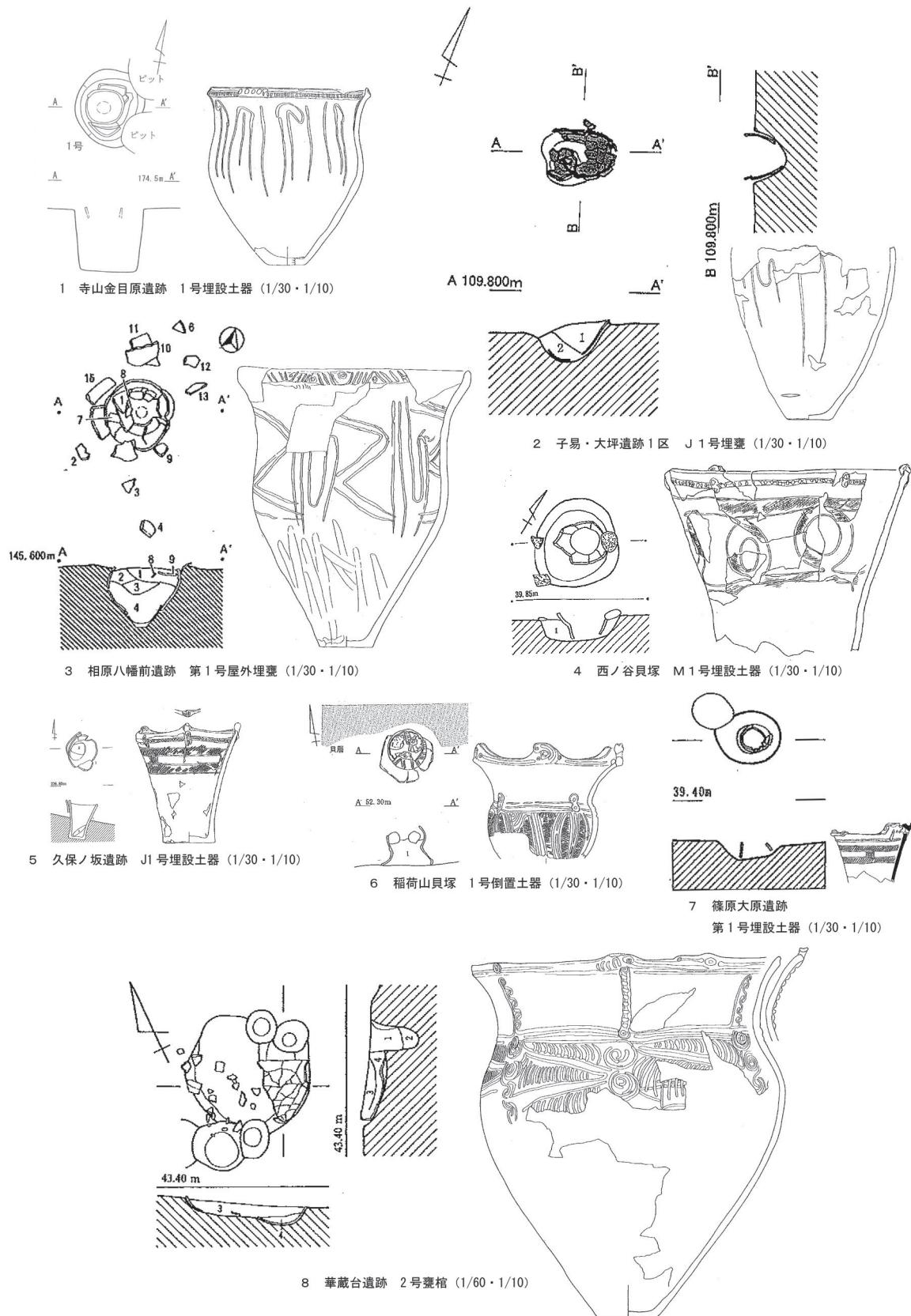


第4図 掘立柱建物跡

### 5. 土器集中（第5図）

該期の土器集中は、7遺跡から8基が報告されている。遺構名も土器集中・遺物集中・土器溜まり等様々である。土器集中として報告されている遺構は、包含層中の遺物密度が高い範囲のもの、完形に近い状態で出土したもの、一時期に廃棄されたものなど様々である。一般的には掘り込みを伴わないものがほとんどである。また、遺構としての統一的な基準が無いため各遺跡・遺構間の比較が難しく、遺構として捉えて良いかどうか課題の多い遺構である。





第6図 屋外埋設土器

## 7. 貝塚・住居内貝層（第7図、第1表）

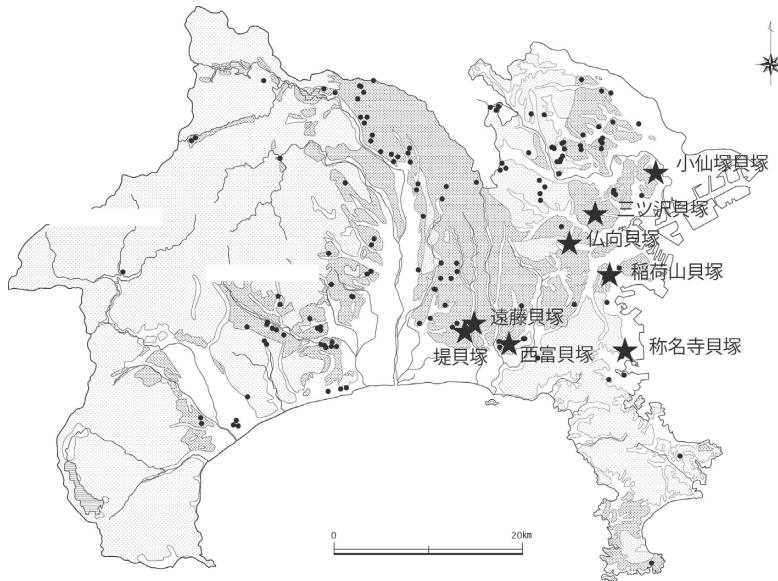
神奈川県内の縄文時代の貝塚は113個所が知られ、時期が明らかな主要貝塚90個所の内、後期前葉に属する貝塚は40遺跡ほどである。ただし発掘調査された遺跡は、更に少なく東京湾沿岸では稻荷山貝塚や称名寺貝塚が知られる程度で、早期から中期の遺跡の調査成果に比べると少ない。また、相模湾周辺の貝塚としては、藤沢から茅ヶ崎にかけての内湾沿いの貝塚があげられる。神奈川県内の縄文時代後期前半の貝塚の特徴としては、内湾に向いて形成される丘陵・台地縁辺部の斜面貝塚が主体であり、環状・馬蹄形をなす大規模貝塚は見当たらない。また、中期から継続して営まれる貝塚や遺構内に貝層を堆積させる例は少なく、比較的短期間に形成された貝塚が多いことが特徴といえる。

(村松)

中村若枝 1994「神奈川県下の縄文時代貝塚を概観して（序）」考古論叢神奈河第3集所収

第1表 神奈川県内における主な縄文時代後期前半の貝塚

貝塚名	時期	備考
1 横浜市小仙塚貝塚	II～B1式	ハマグリ、カキ、シオフキ主体。A貝塚は、20×30mで純貝層の厚さは0.9mを測る。
2 横浜市三ツ沢貝塚	II式	ハマグリ、アサリ、シオフキ、
3 横浜市仏向貝塚	1号貝塚 II～B1式	10.8m×6.1mで0.3mの厚さを確認した。ハイガイ主体でハマグリ、オキシジミで93%を占める。
	2号貝塚 II～B1式	0.6m×0.4mで円形の土坑内に0.2mの厚さで堆積。ハイガイ主体でハマグリを含む。
4 横浜市稻荷山貝塚	第1地点 I～II式	純貝層と間層が互層となり、10層に分層。アサリ、ハマグリ・シオフキ・イボキサゴ主体。調査区全体で土器片錐多量。
	第2地点 I～II式	
5 横浜市称名寺貝塚	C貝塚 II式	キサゴ、ハマグリ主体。
	D貝塚 II式～B1式	ハマグリ主体。
	H貝塚 ～I式	不明
6 藤沢市西富遺跡	第1貝層 II式	チョウセンハマグリ（26%）・タンベイキサゴ（63%）を主体とする貝層。調査区全体で土器片錐多量。
	第2貝層 不明	
	第3貝層 不明	
	第4貝層 不明	
	第5貝層 不明	
7 藤沢市遠藤貝塚	貝層 I～II式	ダンベイキサゴ、チョウセンハマグリ主体。30×20mの範囲で厚さ0.5mをはかる。調査区全体で土器片錐多量。
8 茅ヶ崎市堤貝塚	東貝塚 II式	ダンベイキサゴ主体。10m×10mの範囲に純貝層厚さ0.85～1mで、貝層下に住居跡。
	西貝塚 I・II式	ダンベイキサゴ、チョウセンハマグリ主体（2種で90%）。25m×8m厚さ0.2～0.5cm僅かにヤマトシジミ含む。



第7図 主な縄文時代後期前半貝塚遺跡分布図（・は集落遺跡）

### 8. 焼土址・灰址・炭化物集中（第2表）

ここで取り扱う「焼土址」・「灰址」・「炭化物集中」は、屋外と判断される空間で発見された焼土等の痕跡を対象とする。当該遺構のデータベース作成にあたっては、平成21・25・28年度に集成した県内該期遺跡のデータシートから抽出作業を行い、平面形態、遺構計測値、時期、用途・機能といった各属性の入力作業にあたっては報告書の記載に拠ってこれを実施した。第2表は、該期に帰属する焼土址等が検出された遺跡の一覧で、帰属時期の確実なものを中心に、3市・1村に所在する10遺跡129事例（焼土址112、灰址16、炭化物集中1）を抽出することができた。以下、最も検出事例の多い焼土址を中心に、各属性毎に傾向を概観する。

**遺跡分布** 確認された10遺跡112事例中8遺跡94事例（約83.9%）が県央部に所在する。極端な偏在傾向が窺われる結果となったが、県東部の大規模遺跡では集落等の營造期間が長期に亘ることから、特に伴出遺物のないものについての帰属時期特定が困難な場合多々あるため、結果については一定の留意が必要であろう。

**平面形態** 形態別の比率は、円形基調16基（約14.3%）、楕円形基調47基（約42.0%）、方形基調8基（約7.1%）、長方形基調5基（約4.5%）となっている。全体の約32.1%が不整形の範疇で捉えられ、定形化した遺構ではないことが窺われる。

**規 模** 切り合ひ等のない84基を対象として集計した結果、長軸長は0.22～2.36m（平均約1.05m）、短軸長は0.18～1.60m（平均約0.77m）の間に遍在していることが明らかになった。数値的には遍在幅が大きく、長短比についても極端なピークがみられないことから規格だった遺構とは考え難い。

**掘 方** 112基中109基（約97.3%）が掘方を有している。土坑状に掘方を掘削しているケースのほか、埋没しきっていない遺構や窪地等を利用しているケースもあるようだ。

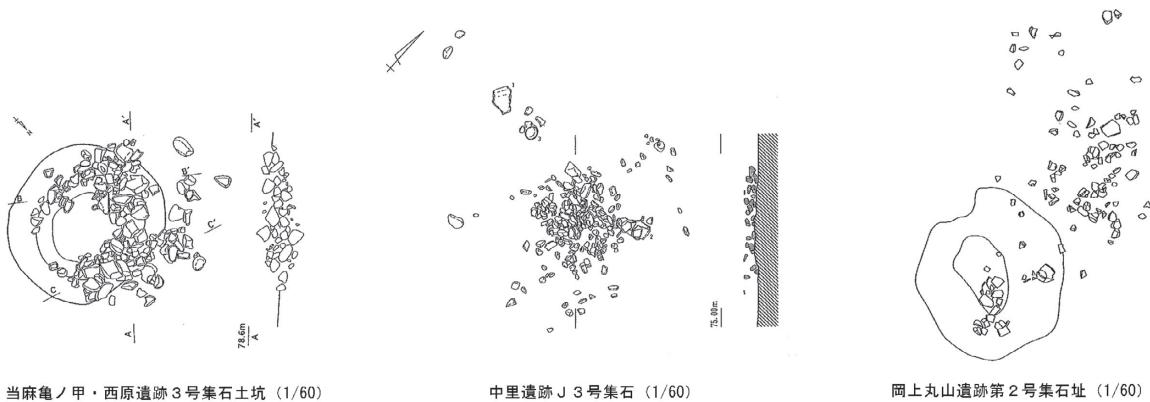
**用途・機能** 112基中91基は遺構の性格（用途・機能）についての記載がある。その所見を集約すると、屋外炉・調理加工施設（74基：約66.1%）と廃棄跡（18基：約16.1%）とに大別される。住居址内に設えられた炉や所謂炉穴等では、屢々赤化した火床面や焼土純層が確認されるが、今回集成したものにはこれに類する火床面や焼土純層が生成されているものはない。当該遺構の性格を廃棄跡と解釈する場合には、このことが根拠のひとつとなっている。全体の62.5%にあたる70基が確認された宮ヶ瀬遺跡群では、中期の事例ではあるものの、恒常的な火処として使用されたものについては屋外の「炉址」として報告されており、屋外炉的な機能を想定している「焼土址」については、焚き火跡のような一時的な火処とみるべきかもしれない。（井辺）

第2表 焼土址・灰址・炭化物集中検出遺跡一覧

遺跡名	市町村(区)	種別	検出数	時期	掘方	用途・機能	備考
稲荷山貝塚第1地点	横浜市南区	焼土址	4基	堀之内1式・ 堀之内式	有	不明	貝層範囲辺部に分布
稲荷山貝塚第2地点	横浜市南区	焼土址	14基	堀之内1式・ 堀之内式	有	不明	貝層範囲内に分布
		灰址	16基	堀之内1式	無	不明	
はじめ沢下遺跡	相模原市緑区	焼土址	3基	堀之内式	有・無	廃棄跡	集落内に分布
畠久保西遺跡	相模原市緑区	焼土址	15基	堀之内式～ 加曾利B式	有	廃棄跡	土器廃棄場内に分布
葉山島中平遺跡	相模原市緑区	焼土址	5基	堀之内式	有・無	調理加工施設	集石との関係性
		炭化物集中	1基	堀之内式か	無	不明	
東谷戸遺跡B地区	厚木市	焼土址	2基	堀之内式か	有	不明	
宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷遺跡	愛甲郡清川村	焼土址	34基	堀之内1式・ 堀之内式	有	屋外炉	6～11基の小群で構成
宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡No. 9	愛甲郡清川村	焼土址	29基	堀之内1式・ 堀之内式か	有	屋外炉	後期土器の主体的な分布範囲内に占地
宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡No. 10	愛甲郡清川村	焼土址	1基	堀之内1～2式	有	屋外炉	小形の粗製深鉢を正位で埋置
宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡No. 11	愛甲郡清川村	焼土址	6基	堀之内2式・ 堀之内式	有	屋外炉	

## 9. 集石（第8図）

堀之内式土器が出土し該期のものと推定しうる集石は5遺跡11基を数えるのみである。他の時期の集石同様、掘り込みを伴うものと伴わないものとがあり、伴うものが8例、伴わないものが3例であるが、岡上丸山遺跡第2号集石址のように伴わないと報告されながらも近接して掘り込みが確認され、関係性が伺われるものもある。礫の分布範囲は1～2mほどで、平均値は1.6mである。掘り込みの平面形は橢円形基調のものが6例、円形基調のものが岡上丸山遺跡のものも含めて3例と橢円形が優位である。掘り込みの長軸の規模は0.7m～1.8mほどで、平均値は1.4mである。他の時期の集石との明確な相違を確認し得なかつたが、加曾利E式期の集石で認められた掘り込みの底面に礫を敷き並べたような例は認められなかつた。（粕谷）



第8図 集石

## 10. その他の土坑

土坑とされる小形の堅穴状の遺構のうち、その性格が土壙墓、貯蔵穴として一応の定着をみているもの以外が、どのように理解され扱われているのか、いくつかの報告例からみていく。

該期の代表的な集落址である川名向原遺跡、原出口遺跡の報告では、土坑から「貯蔵穴と考えられるもの」「墓壙と考えられるもの」を分類抽出した後、「平面形が円形を呈し、深さで劣る一群」として、特に「円形土壙」が設定されている。「円形土壙」は本来貯蔵穴として認定される場合が多いが、墓壙として二次利用されることもあることから分類項目として設けられたと説明されている。ここで問題とされた二次利用や、埋没過程の判断（自然堆積か人為的な埋め戻しが認められるか）の根拠は土坑の性格決定をより困難にしている。また、帷子峯遺跡では該期以外のものも含めて合計201基の土坑が発見され、平面形から3大別、さらに断面形、底面ピットの特徴等から25類に細別した。このうち後期前半には4類型の袋状土坑「貯蔵穴」がみられるとした。そのほか、早期後半の「陥し穴」を除いた、鍋底状・皿状の断面形を呈する土坑に関して、後期前半の土器が出土しているものもあるが、分布その他に規則性は見出せなかつたとして「不明のもの」に分類されている。該期を主体とした遺跡においても形態的な特徴からの類型化が難しく、また遺構の時期決定に用いることのできる遺物の出土もみられないといった事例（例としては池之端・坂戸遺跡、寺山金目原遺跡9904地点、太岳院遺跡95-1地点等）が少なからず存在する。稻ヶ原A遺跡では該期の土坑が22基発見されており、断面形が円筒形、袋状を呈する土坑は貯蔵穴と判断されているが、残りのうち11基は平面形・断面形が「柱穴状」の形状を呈するもので、その性格についての言及はない。類例は篠原大原遺跡で発見されているが、ここでも性格についての記述はみられない。「柱穴状」の土坑は山田大塚遺跡、川名向原遺跡でも発見されており、ここでは貯蔵穴として報告されている。（山田）

### 11. 木道（第9図）

縄文時代における木材構造物の発見は、低湿地遺跡での調査が近年増加しており杭列や木組み遺構などの事例も増えつつあるが、県内での報告事例は極めて少ない。木道の調査事例は横浜市都筑区港北区所在の古梅谷遺跡があげられる。遺跡は早渕川左岸の樹枝状に広がる開析谷に立地しており、現在の水田下位2mの深さで広がりを有している。谷の開口部から約500m奥に入った地点に木道が確認され、谷幅100mの低湿地を横断するものと捉えられている。木道は4基のまとまりがある。木道Ⅰは構造が把握できる状態で確認されている。枝打ちされた木材を渡り木として直線的に並べ、端部は枕木を添え杭と結束している構造が明らかになっている。樹種はクヌギ・クリが主体である。木道の直下ではその周辺に限定されて堀之内式期土器が分布しており、木道の帰属時期を示していると捉えられている。木道Ⅱは湾曲や枝分かれした木材が多く用されているが木道Ⅰに平行するよう発見され、樹種はヤマグワが2点のほか、クリが圧倒していることから人為的な構築と考えられるものである。その他2基の遺存状態は良好ではないが、木道の残骸や簡略的な構造のもとと考えられている。集落との関係では、周辺遺跡の時期と位置関係から木道の延長線上に所在する西ノ谷貝塚で当該期の集落が形成されており、その構築に関わっている可能性が高いと考えられている。

### 12. 帯状粘土列（第10図）

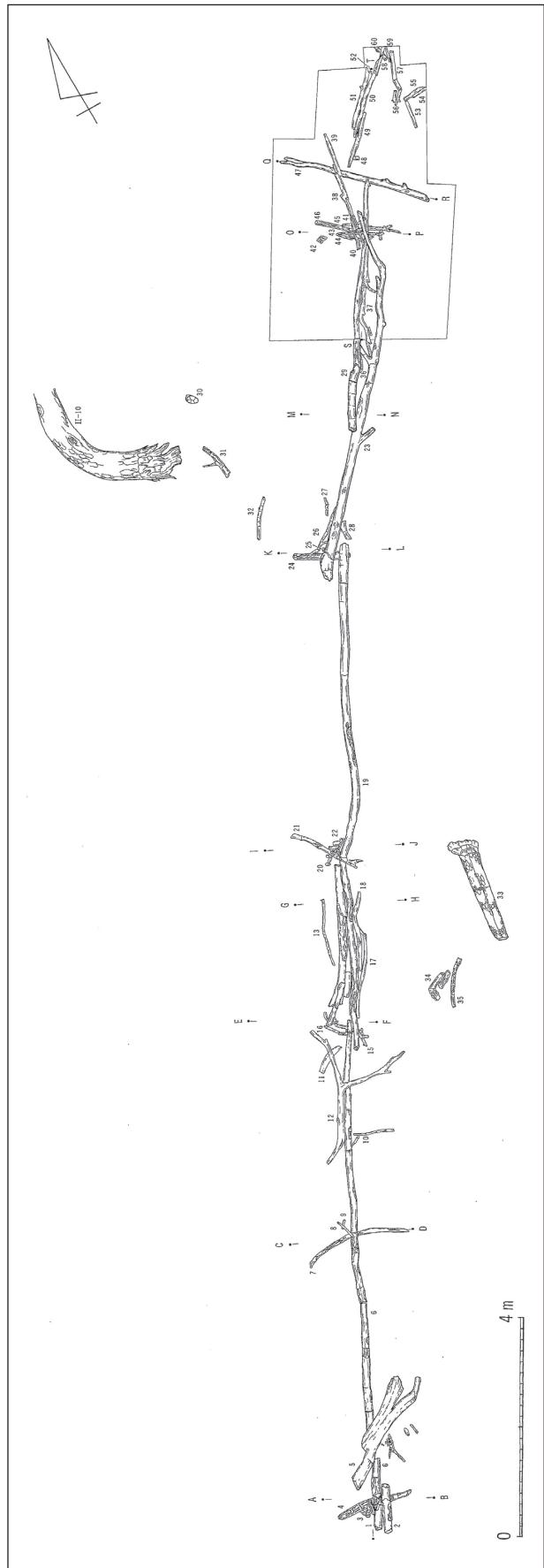
伊勢原市所在の西富岡・向畑遺跡では、標高46mの丘陵上に硬化した粘土塊が平面的な広がりを持って断続的に列状に並ぶ「帯状粘土列」が延長22m・最大幅0.4mで発見されている。軸線はほぼ南北で南西斜面に形成されている。これは連続した粘土列が風化により断続的な状態になったものと解釈されている。粘土の由来は関東ローム層起源で、人為的に形成されたものと考えられている。第1面に比して第2面は規模が小さい。帰属時期は近接した同一面などの出土土器から称名寺式期～堀之内式期の所産であると捉えられている。類例が希少であることから用途や機能などは明らかではないが、集落内の道や祭祀などに関連した施設である可能性などが想定できるが、集落の中で分布的な位置づけや他の遺構との関連性も検討した上で評価を行っていく必要がある。

### 13. 水場遺構

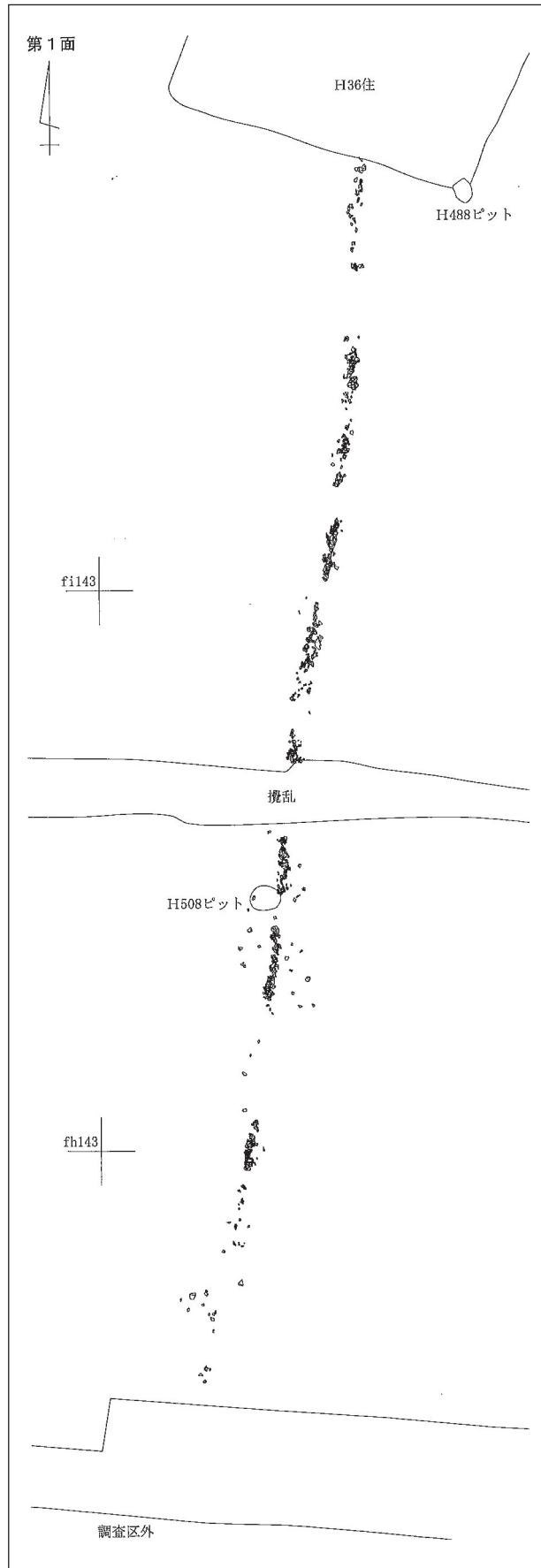
平塚市真田・北金目遺跡群15D・15E区（入谷戸遺跡）では埋没谷の調査が行われ、堀之内式期の土器・土製品・石器などの他、木製品や動物遺存体などが出土している。谷底部では延長61mにわたる礫敷水場遺構が発見され、湧水利用に関連した施設であると捉えられている。斜面部では土坑状の水場遺構が4基発見され、貯蔵や水さらし施設と考えられる。埋没谷の西側にあたる谷頭に近接する台地上に形成された王子ノ台遺跡では当該期の集落が発見されており、水場遺構と直接結びついた集落であると捉えられる。

ここではその他の遺構として、木道・帯状粘土列・水場遺構を概観した。低湿地遺跡の調査では木道や水場遺構などとともに木製品や動物遺存体などの他、有機的な自然遺物も含めて台地上では解明できない豊富な資料が出土している。今後も調査事例は増加しており、他の類例なども併せて比較検討を行っていく必要がある。

(天野)



第9図 古梅谷遺跡 木道I (1/120)



第10図 西富岡・向畠遺跡 帯状粘土列(1/120)